（業務用参考資料）

Economic Indicators

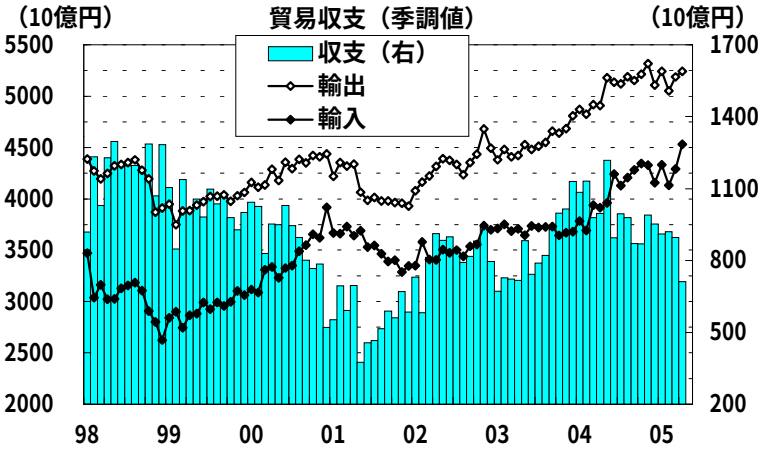
定例経済指標レポート

テーマ：貿易統計（４月）　　発表日：５月25日（水）

～　中国向け輸出の不振が懸念材料　～　　（No. Ｊ－24）

第一生命経済研究所　経済調査部

担当　副主任エコノミスト　新家　義貴



（出所：貿易統計・財務省）

(10億円)	季調値			原数値
	貿易収支	輸　出	輸　入	貿易収支
04年4月	996	4909	3913	1075
5月	1217	5179	3962	936
6月	895	5137	4242	1141
7月	994	5122	4127	1129
8月	980	5189	4209	573
9月	870	5154	4284	1213
10月	869	5212	4343	1154
11月	989	5317	4328	597
12月	952	5109	4157	1133
05年1月	911	5241	4330	194
2月	920	5052	4132	1090
3月	896	5186	4291	1120
4月	712	5243	4531	963

（出所：貿易統計・財務省）

前年比	輸出金額	輸出価格	輸出数量指数				輸入金額	輸入価格	輸入数量指数			
			全体	対米	対EU	対アジア			全体	対米	対EU	対アジア
04年 1月	11.3	▲ 1.7	13.1	0.4	11.1	20.2	1.1	▲ 4.4	5.7	▲ 6.4	2.1	8.3
2月	10.2	▲ 1.6	12.1	5.9	8.7	10.2	▲ 0.8	▲ 3.6	3.0	▲ 5.2	5.2	5.3
3月	13.2	▲ 0.8	14.1	7.2	14.3	12.6	12.4	▲ 4.3	17.5	10.9	17.0	21.2
4月	10.8	▲ 2.1	13.2	4.0	6.3	14.6	6.6	▲ 3.2	10.2	▲ 1.0	4.8	11.9
5月	10.0	▲ 0.6	10.6	▲ 4.8	7.9	11.2	5.0	5.3	▲ 0.3	▲ 7.1	4.7	4.6
6月	19.4	1.3	17.9	12.3	18.8	19.3	15.5	5.1	9.9	4.3	12.2	12.4
7月	14.3	1.0	13.2	6.0	11.4	15.7	8.4	4.5	3.7	▲ 0.2	4.6	7.0
8月	10.5	▲ 0.5	11.1	5.1	7.7	11.8	18.7	4.9	13.1	23.1	6.1	14.8
9月	12.1	0.5	11.5	7.2	4.7	16.5	12.5	8.5	3.7	17.1	▲ 2.7	8.8
10月	11.7	7.0	4.3	▲ 3.7	1.2	7.9	12.7	12.1	0.6	40.7	▲ 5.4	▲ 2.2
11月	13.4	7.6	5.3	2.8	3.1	13.6	28.1	11.8	14.6	10.6	11.8	16.0
12月	8.8	5.9	2.7	0.5	3.2	6.8	11.1	8.1	2.8	16.6	▲ 0.3	4.5
05年 1月	3.2	6.5	▲ 3.1	▲ 5.2	▲ 14.6	▲ 1.5	11.4	8.7	2.5	▲ 0.5	4.2	4.9
2月	1.7	6.1	▲ 4.2	2.3	▲ 6.7	▲ 3.7	11.4	6.6	4.5	4.5	▲ 3.4	12.2
3月	6.1	4.9	1.1	3.4	▲ 9.2	1.0	7.7	6.0	1.5	▲ 1.2	▲ 5.1	4.7
4月	7.8	9.5	▲ 1.4	0.7	▲ 2.6	▲ 2.0	12.7	13.5	▲ 0.6	▲ 4.6	2.4	2.7

○ 原油高が輸入額押し上げ

2005年４月の貿易黒字額（原数値）は9,628億円（前年比▲10.4%）と、ほぼ市場予想（コンセンサス8,800億円、レンジ6,710～11,640億円）並みとなった。輸出数量が再び前年比マイナスとなるなど、輸出が中国向けを中心に引き続き伸び悩むなかで、原油価格上昇を受けて原料品・鉱物性燃料輸入が増加したことから、貿易黒字は2ヶ月ぶりに減少している。季節調整値でも、輸入が前月比＋5.6%と輸出の同＋1.1%を上回る伸びとなったため、貿易黒字は前月比▲20.5%と大幅に減少している。こうした、輸出の低迷と原油価格の高止まりという状況は当面続くとみられることから、貿易黒字は今後も緩やかな縮小傾向で推移すると思われる。

なお、この原油価格の上昇は企業にとってはコストの増加に繋がるが、現在の経済状況では企業がなか

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見通しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。

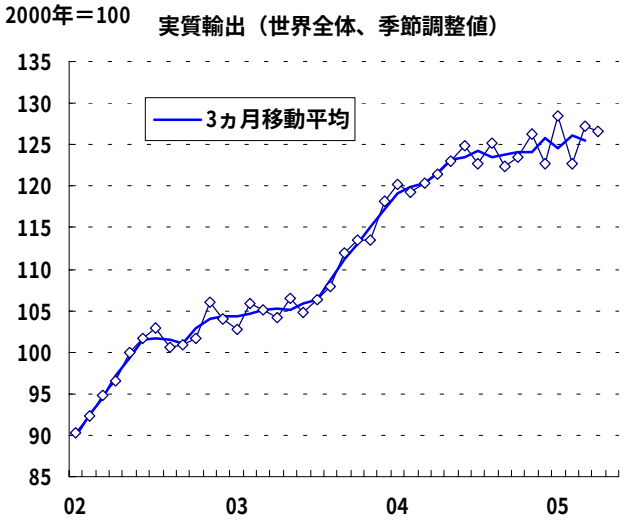
なか価格に転嫁できないため、企業収益の減少という形で影響が出てくる。簡易的に試算をすると、原油価格が想定よりも１バレルあたり10ドル上昇すれば、企業収益は３％ポイント程度押し下げられる。この影響によって日本経済が腰折れする可能性は低いと思われるが、一定程度の下押し要因になることは間違いない。

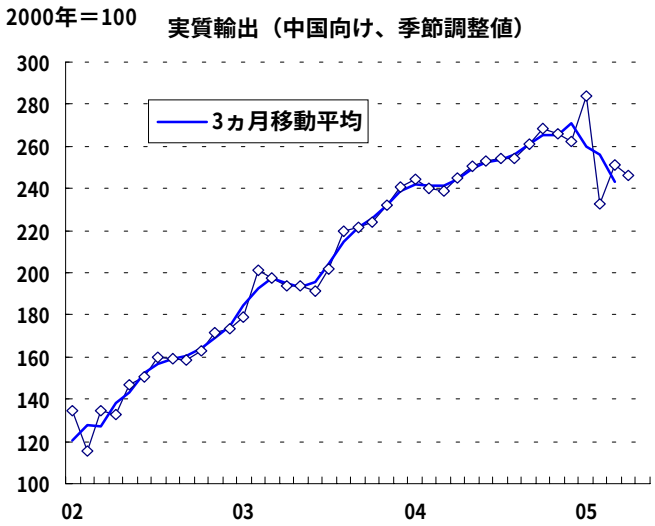
○ 輸出は横這い圏内の動き続く。中国向けが押し下げ要因に

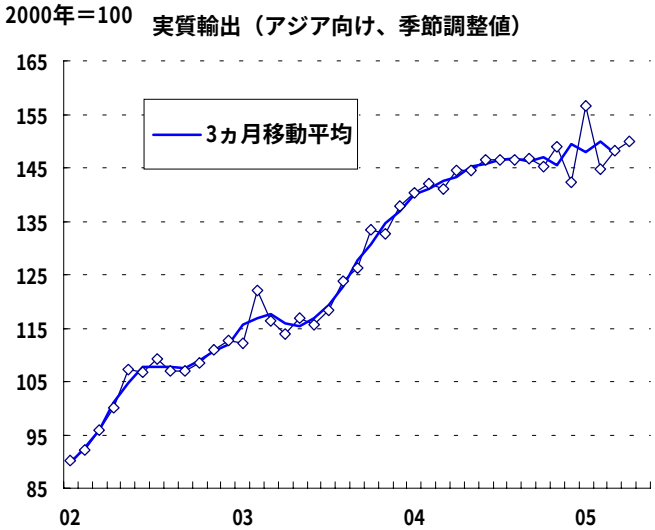
実質輸出（輸出額／輸出物価、季節調整は当社）は、季調済前月比▲0.4%（３月同＋3.7%）と、ほぼ横這いとなった。３ヵ月移動平均で均してみても、ほぼ横這い圏内の動きが継続していると判断される。

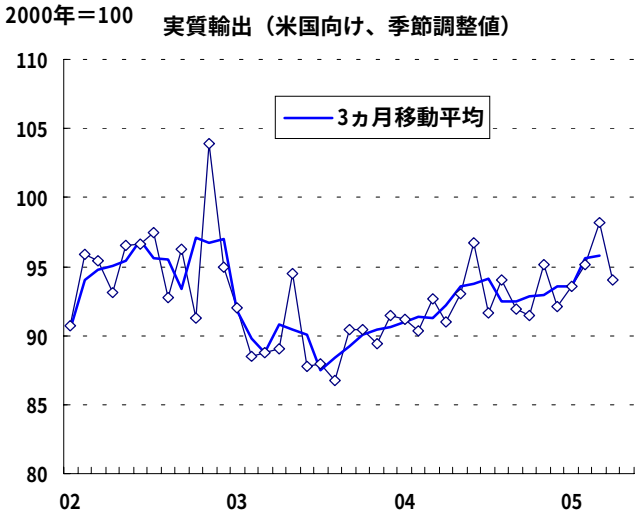
特に目立つのが中国向けの不振だ。中国は現在も高成長を続けているのだが、昨年、需要の伸び以上に輸入や生産がなされた結果、過剰在庫が多く存在する状況にある。この在庫調整の影響によって日本からの中国向け輸出が低迷していると考えられる。財別でいえば、特に化学や鉄鋼などの素材関連、また、設備投資関連の一般機械などの落ち込みが目立っている。この在庫調整に目処がつくには、あと半年程度かかるとも言われていることから、当面は中国向け輸出に大きな期待はできまい。

また、輸出に５～６ヵ月程度先行する傾向のあるＯＥＣＤ景気先行指数や米国ＩＳＭ製造業新規受注といった指標も足元までに明確な改善はみられておらず、先行きの輸出も伸び悩むことが示唆されている。これまでは、春から年央にかけて輸出が回復してくるといった見方が多かったのだが、足元の状況を考えると、輸出の回復時期は若干遅れそうだ。輸出回復の時期は、中国の在庫調整に目処がつき、内需が復調すると見込まれる10-12月期以降と考えられる。それまでは、輸出は一進一退の状況が続くだろう。









と判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見通しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。